

# 昭和57年度貝類漁場の形成条件 ・ 適正利用に関する研究

## (要 約)

田中 俊輔・青山 禎夫・仲村 俊毅・平野 忠  
高橋 克成・三津谷 正・永峰 文洋

### 1) 増殖技術改良研究

地まき増殖を実施している15漁協・支所の漁場において昭和56年産放流ホタテガイを昭和57年9～11月に桁網調査、一部漁協は潜水によって調査した。 $\frac{\text{生貝中の正常貝}}{\text{全個体数(生貝+死貝)}} \times 100$ が70%以上の漁協・支所が半数になった。青森市後潟漁協では、55年度調査0.6%、56年度調査では34.8% (12月放流)、10.2% (3月放流)、57年度調査では81.9%になった。

### 2) 地まき増殖実証試験

昭和57年9月に第2回追跡調査を桁網で行った。生残率100～93.0%、生貝中の異常貝出現率は6.1～6.7%、 $\frac{\text{生貝中の正常貝}}{\text{全個体数(生貝+死貝)}} \times 100$ は90.3%で、この値は同時期に行った地まき増殖実態調査結果に比較すると、青森市漁協油川支所の92.7%に次ぐ値であった。放流時からの増殻長も28～34mmと良好な成長を示した。

### 3) 漁場の有効利用および生産性評価研究

放流漁場内の大型底生生物 (56年産放流ホタテガイ、残存ホタテガイ、ヒトデ類、ウニ類、その他) のうち、ヒトデ類の割合が高かったのは、横浜町 (St. 2) 43.3%、平内町東田沢 (St. 3) 40.2%、ウニ類は野辺地町 (St. 1) 59.5%、(St. 2) 23.9%であった。しかし、地まき放流や移殖は古くから行われており、放流前に漁場の清掃 (ヒトデ等の駆除) を実施する漁協も少ない。このことから桁網で採捕可能な大型底生生物から漁場生産性を判定するには問題があるように考えられた。

### 4) 漁場環境条件調査

56年度末からの低水温、低塩分が4月末まで続いたのが大きな特徴で、ホタテガイの生殖巣指数が20%をこえた期間が約90日も続いた。

---

本研究の詳細については、「昭和57年度貝類漁場の形成条件・適正利用に関する研究報告書、57年11月」(コピー)を参照されたい。